

手塚治虫作品集その21——『火の鳥』

はじめに



『火の鳥』は、どこから読み始めたら一番良いのだろうか？とつくづく思うことがある。この作品は、どこから読んでも読み手に時空間の世界を超えて「火の鳥」と遭遇する人々に出会うことができるからだ。以前、黎明編を扱って講義した事柄を再度引つ張り出してみた。

『火の鳥』黎明編〔角川マンガ文庫所収〕

時は古代。女王ヒミコのヤマトイ国と対立するクマン。部族間抗争は烈しく、

戦場は血の海に。度々の危機をくぐり抜けて

数奇な運命をたどる姉弟ヒナクとナギ、防人の猿田彦。

そして、手柄欲しさに「火の鳥」を狙う欲望の男たち。

酷くも美しいヤマトの自然を背景に

「永遠の生命」へのそれぞれの「戦い」を描く。

火の鳥の知識伝達とその方法

その1 目前に回想するウラジのことば

○「火の山の怒りくるつた日にならず火の鳥があらわれるといったシビキのおババのことばはほんとうだったぜ」〔8頁1コマ〕…本当。

○「あいつの生き血をしぼつてのめばあの鳥が火の山といっしよにずっと生きてきたように——のんだものはぜったいに死なないからだになるという…永遠のいのちを手にいられると……おババがいった！」〔8頁3コマ〕…一緒。絶対

○「だめだ！あいつは死なないんだじんじょうの弓矢や槍ではやつからだはびくともしないんだ！」〔9頁8コマ〕…尋常。

その2 女王ヒミコに語って聞かせるササノオの伝聞回想のことば

○というの……火の鳥は弓で射ようと槍で突こうと絶対に死なないのだ。あの鳥はもう何百何千年生きていくかわからぬ。クマンの村の囚人の話によれば、その男のじじめの子どもの頃こそそのさらに前のじじめから火の鳥のうわさを聞いたとかいうことだ。そのうえ、火の鳥はかしこく、人間以上の知恵があるそうだ。舞いも踊れば人語もわかるし、われわれがろくに使ったこともない文字というものも、ちやんと知っているという話です。そして火の鳥は、ある時期がくると、われとわが身を、火の壺の中へ飛びこんで焼き、その中から、新しい体が生まれ変わるといふ……〔64頁〜65頁〕

その3 猿田彦がナギ伝えることば

○おまえも知つてのとおり、火の鳥はもう何千年も生きていふという、ときどき火の中へ飛びこんではわれとわが身を焼き、新しい若鳥となつて生まれ変わるといふ話だ。その生き血を飲めば永遠の命を得られるそうだ……おれがヒミコさまの命令で、おまえの村を滅ぼしたのも……この村を前進基地にして、大がかりな火の鳥狩りを計画しておいでだったのだ〔132頁4コマ〜133頁2コマ〕

その4 ニニギノミコトが火の鳥を目前に回想

○「あれは……伝説にきいた火の鳥だっ」そういえばおれが子どものころ乳母から聞いたことがある
東海の倭の国に黄金に輝く仙鳥がいてその血を飲むものは永遠の生命を得るとか……その鳥はわれ
とわが身を炎に焼き 若鳥に生まれかわるのだそうだ ああ鳥こそ……まさしくそいつだ〔*18頁6
コマ・7コマ〕

かながき漢語表現について

※上記にも示しておく。

○ナギ「にさんの弓はこのかいわいきつてのうでまえなんだクマだつて一矢なんだぜえつ」〔13頁7コマ〕…界限。

○「かんたんにしとめられるものなら 今までにだれかがしとめておるわい」〔13頁7コマ〕…簡単。↓○天の弓彦
「火の鳥にもあんがい簡単にお目にかかれそうだ」〔*168頁7コマ〕

○「やめいつナギこは病人のへやじゃぞ」〔14頁1コマ〕…部屋。

○ナギ「ほーらみろつにいさんがもどつたんだ！火の鳥を射とめたんださまあみるモウロクジジイ」〔14頁4コマ〕…
毫碌。

○「ウラジとヒナクをいつしよにていねいに海ほうむつてやるべえなんしろあんないい夫婦はなつかたげのう」〔16
頁6コマ〕…一緒。丁寧。案内。

○「長たいへんだ」なんだつぞうぞうしいまた何かあつたのか？」〔17頁1コマ〕…大変。騒々しい。

○「じようだんじやないそんなことをしたらよけい死ぬのを早めるばつかりだ」〔20頁2コマ〕…冗談。余計。

●「おだまりーできのわるいじようだんはおよしー」〔*174頁2コマ〕

○ナギ「ほらつ おんとうを持つてきてやったよ」〔24頁8コマ〕…お弁当。

○「お 今夜は シラヌ火が ずいぶん出て いるようだね」〔30頁3コマ〕…随分。

○「今夜ほど みごとな シラヌ火は はじめてだ」「えんぎでもねえが……」〔30頁4コマ〕…縁起。
○「ふーん……」「ところで結婚披露の ぐちそうが待ってるぜ さそいにきたんだ」〔30頁8コマ〕
…御馳走。

○ナギ「グズリのようすがへんだぞ」〔31頁2コマ〕…容子。変。

○ナギ「見たこともないかつこうのいくさ人だ シラヌ火のばけものどもだろうか？」〔35頁4コマ〕
…恰好。

○ナギ「ちくしよーつ くそーつ んねんつ うむーつ」〔46頁8コマ〕…生。

○「 …… あいつはよくやったな 間 というものを おれはけい つしておつたが よくい

た 見なおしたぞ」〔47頁12コマ〕…。

○スサノオ「よし ごころうだつた さがつてやすめ」〔60頁1コマ〕…。

○「ただいま ごとうの 中で」ります お待ちを……」〔60頁2コマ〕…。 ○ヒコ「な
ぜ祈禱をやめる」〔*220頁3コマ〕

○「あの らのヒ を見たらむちやくちやに はらが ってきたつーー」〔61頁2コマ〕…。

○ロハバ「わらわに ごたえしたなつ ゆるさぬぞ たかが 人のぶん いで!!」〔94頁4コマ〕…分。

○「えーい ぶきげんじゃ」〔9頁10コマ〕…。

○「のめ おまえは もう りつ な狩り だ」〔95頁10コマ〕…。

○スサノオ「もう がまんならんつ 上つす 猿田彦を出すように命じてください」〔110頁7コマ〕…。

○猿田彦「ナギ おまえはどうするつもりだ こゝに むわけにはいかんぞ ヒシコさまの 手がもうす
まへへ上 してくるだろう ヒシコさまは 走 に ようしやはなさらなからな……」〔131頁7コ

マ」…容。
 ○弓彦「弓彦一生のふかくでさ ……」[*175頁5コマ]…
 ○弓彦「どうもおかしなげはいがしやがる ……火の が一あばれだしそうなげはいだ……狩りは中し
 たほうがいいぜ」[*175頁7コマ]…。
 ○「うらがりものっ!!」「むほん人だれだつて さぬ」[*226頁3コマ]…。

かながき和語表現について

○「新しい」新しい 火のつぼがつ「[*186頁3コマ]↑○「ナギー」をつけろつ やつは火の壺
 のほうへ 飛んでいくぞつ」[*144頁3コマ]○「進軍のタイコを鳴らせ! 全軍火の壺へ進め! 霊術をもってみ
 んなを守つてあげるよ!」[*176頁3コマ]

ストーリーリー解説文章

○ギリシア神話では 火山の神を **バルカン**という ひとたび怒ればその声は 大気を逆巻かせ 海をふるわ
 せ やけたたれた 汚物は あたり一面にあつい層をつくり 生きものも生きぬものもすべてうめつくされる
 のだ **バルカンの**どういいう気まぐれか…… その煉のなかに…… たくましくはばたく一つの生命があつた
 それは 死鳥とも火の鳥ともよばれていた[*7頁 8頁]

○「あをカビ」 「」 「」
 みなさんはもう「」 知かもしれないが の中には ニシリ という がふくまれて
 いる ニシリ は伝 や んだりするきず によくきく ヒナクの は れ で ったきず

あとからばいきんばい が はいつたらしいが たぶん という ろしい だろう
 にも ニシリ はよくきくのた ただ ふつうは 射すればよいのだが この時 は そんなも
 のはないから からのませるほかはなかつた こうすると 射の らいの分 があるのだが ぜ
 んぜん きかないということはない 「21頁」

みなさんはもう「ご存知かもしれないが 青カビの中には ペニシ
 リンという化学性物質がふくまれている
 ペニシリンは伝染病や 腫んだりする傷によくきく ヒナクの病氣
 は 枯れ草で切った傷あとからばい菌が はいつたらしいが たぶ
 ん破傷風という恐ろしい病氣だろ う 破傷風にも ペニシリンはよ
 くきくのた
 ただ ふつうは注射すればよいのだが この時代は そんなものは
 ないから口からのませるほかなかつた こうすると注射の五倍くら
 いの分量がいるのだが 全然きかないということはない



ヒミコについては 中国の「倭人伝」の中に その頃の はたぐさんの国があり なかでも大きな国は マ 国で その国は もと男の王が治めていたが その王のあとに つかえる女ヒミコが王 についた とするされている ここで は ヒミコが の つまり 女だったことである なぜ 女なんかを女王にしたのだろうか おそらく いをやったり いをしたりして 人命を める があるというので： 人々がヒミコを れうやまっていたのだと思われる ヒミコはその いので その国だけでなく あちこちの国をもしたがえて その いは大変なものだった

○「91頁〜92頁1・コマ」

○ 話によれば ニニギノミコトが 界へおりてきたとき 中で サルタヒコノミコトにであつた 出会つたという。



神話によれば 天孫ニニギノミコトが下界へおりてきたとき 途中で怪物サルタヒコノミコトに出会つたという サルタヒコノミコトは 普通テングの先祖といわれている 薩摩の姿で 頭が赤い 鼻が非常に高い いろいろな顔に変わっている テングは 行者の姿で いまぬいがか 鼻の端が丸い いろいろな顔に変わっている サルに非 常に強いが 鼻の端が丸い いろいろな顔に変わっている サルに非 常に強いが 鼻の端が丸い いろいろな顔に変わっている サルに非 常に強いが 鼻の端が丸い いろいろな顔に変わっている



サルタヒコノミコトは、ふつう グの といわれている。 つきが ろしく、 が いは、 才あたりに ンでい おおむかし というサ に よく ている。 から、 わが国に つてきた 人の たちが、このサの 大いしやう を、 グにたくしたと、 いえないこともない。また、 サ ヒコは、もともと ンでいた の にはなかつたかともいわれ ギリスの などの説、 国から れついたニニギノミコト一 に、 したのではな いかとも思われる。この 語の中では、 猿田彦は、ただの 人 にはあるが、お の の ということになっている。

「142頁」

○ こだいの つつほんれつとう には、馬がいなかった。馬は大 の で、人間の手に へ つてきたものだ。 その人間たちは ひろい大 を、馬を使ってあちこちに していた の だったろうといわれて いる。この きばみんぞく は、 から対 や や 地へ りこんできたのだった。[*21 頁]

○ たかまがはらぞく —と、その男たちは のつた。 とは……、ニニギとは……、何ものなのか。 の説によれば、 せいき 世 から 世 にかけて、 中国や あたりを、 に つて けま わつていた ぎばみんぞく が、ぞくぞくと を つて、 につほんれつとう してきたという。 そして、もとから、 ンでいた たちを、つぎつぎに して、のちの の マト を、 いたのだとしている。

○ しんわ 話にでてくるニニギノミコトは、 から の にくだった の子ということになっているが、 ほんとは、大 から つてきたただの の ようなものだったというのである。[*218頁]

○ この まえを、 人たちはどんなに 々しくうやまい、 の にき みつけたことだろう。 しかし、 は、じっさいには しまかつたのだ。 ほんの たちは、ずっとあとになって、 ころに作 り出した 空の なのだ。だから、みんな百 ちかくまで生きていたなどと、でたらめなことを いている。

○ だれかが、 マト を作つたことはたしかだ。 のうちのだれかが、それまでの の を して、 いたのはうそだったのだろうか。 が、金のト などを使つて、 マトに、はじめての の を

マトに、^{くに}国の^{みやこ}を作ったのだという。
は、こうして、^{しんりやく}と、^{たたか}いと、^{ぎやくばつ}の^{れきし}のなかで、だんだん^{くに}国がととのっていったのだ。
つた。[*254頁 255頁]

括弧によることばの共通表現置き換え表現

この記 は、作品中に 語を した 、これを のことばに えていくところで いられている。

○ 猿田彦 「(こ)は が というんだ ト が いだろう」〔76頁6コマ〕

○ ヒミコ 「人^{みぶん}どもよ 聞^きけ 目^{もくてき}はただ一つ あ^ひの火^{やま}の^{せいかう}にすむ火^{とり}の鳥^{とり}じゃ」「火^ひの鳥^{とり}をしとめたものには身分^{みぶん}の を わず つの つの と 生^{せい} 人を^{ひと}つかわす」[*254頁2コマ]

○ 「おとうはまえにおれにいったことがあるな? どうし^{むす}結^{むす}ばれば やコ が生^{せい}まれるおそれがあるって……」[*330頁11コマ]

ことばの注釈

○ 「^にげられないわ まわりから ^{ぶすま}だわ」[*216頁2コマ]
矢^やぶすま 射^し手が ^なび なってすきまのない^なこと。

○ ニニギノミコト 「たしかにそのとおりかもしれん」「倭人^{わじん}どもにあわれみなどかけてはおれの^{だいけいかく}大^{じっげん}計^{けい}画^{かく}はないからな」[*250頁6コマ]
倭人^{わじん}…大^{たい}の人間^{にんげん}たちは の ^{せんじ}の^{うみんぞく}のことを倭人^{わじん}と ^よんでいた。

象徴語

○ コウ コ コウ コウ 「29頁9コマ」 の鳴き声だが、「コン 「ということばに けいられている。」

別なキャラクターが登場

○ 「ただの ^なのに」〔54頁7コマ〕「このひとつ前のコマから 場^ばしている。その人物は、「手^て自^じである。この場面だが コミク『火の鳥』黎明編」 46 2 28日 「では、「練馬温

泉^{いづみ} 虫^{むし}プロ」 「とき ^み、^りが「^{コマーシャル}と している。〔56頁7コマ〕

「117頁6コマ」の ^に をかぶらないめがねをかけた 「手^て」が 場^ばする。手^てき文^{ぶん}字^じ 「の ^も ^える。」「〔117頁4コマ〕には大^{おほ}の^{うへ}にヒー^マークと「 の 文^{ぶん}手^て ^き文^{ぶん}字^じ ^き ^み」もある。

「ぼくたちやあ つ だい」[*158頁10コマ]と「ヒヒ…まるでイの ^みたいに ^{むざんす}」[*1頁1コマ]に は、 夫^{つま} の「 ^おそ ^くんなど…とイヤミ」という なマンガのキ^キラクターが描^{えが}かれたりする。



「オーオー オーオー のんめし かし……」
「にえ……うのら や……」
「…… がうろ ^{かん} ^さたしまでといよ血 ^{オオー}」
ちよいとでましたさんかくやろうが ^{しかく}しめん^のや^らの
うえに ※ 「」を ^{さま}に ^んで の^りコトとして

っている。

「さても一のよ

わしのようなる

がの上で

とるとは はばかりながら

しばし御を こうむりまして

何か一読み上げます

文 いや 間 いは

にそのは おしなされ

しなされば 文にかかるが

オーサー

この編を に してみることにする。世編上・ かななる語を見ていこう。

この世編は、 という 語から き出されていく。生の進を語りの におく。

この語を見 えているのは、 の大きな の グであった。 にはなぜか 手が いので

ある。そう、 編に する 見の 王なのである。 編の356頁に、

○ 見の 王と がそのあとどうなったかはだれも知らない。』 文 記』によれば 国

の地に の れて をよくし、 百 にして となる 々。 王があ

ギシな生命を ちつづけ、その地の に変 していったことは大いに想 できるの

である。

とあって、これを してきたのである。「 か……」「わしもずいぶんいろいろな いを見てき

たもんだ。あの や の の いもついこないだのできごとのようなだ」「あれから何

年になるかな。では 一 が をにぎっておるが……。いずれ らを す が出てくるじやろ

う」「むなしい……。……。」「 いは、なにも人間だけにあるもんじやない。虫 ラにさえ

あるんじや」「 はむなしいものよ……。」「上19頁」「 った の は、かならずいずれのつ

とられるさだめじや」「わし、そののつとるほうのちからが好きなのじやよ」「上20頁」

だが、 集 ではこの は に されている。ここに何らかの編 が されていることにな

る。「二一年」の文も2コマめに して始まるのが 集 である。



ミ
ス
ク
ラ
を
い
の
り
の
ほ
う
さ
く
作
を
ね
が
お
ど
う
踊
り
じ
や
。



世編に
する人は、
義のよしつね
みなもの
として
えるの。

の
て
の
の
にくすぶる若き
年とその